

之と存る子細は、文祿年中、上方に於て、大地震のゆりたる義有之、京都大佛の像などもゆり崩し、權現様の聚樂の御屋形も大破に及び、御家人衆中も、押に打れ死る衆杯も有之、由其節伏見小幡山城中に於て、築地の所に立たる奥向の御屋形を震崩し、中居以下の女中五百人計りも、相果候に付、老女中、大閤の前に於て、今度の地震に、あまたの下女共、押にうたれ相果候に付、俄に其代りを召抱へよとある義を、秀吉公聞たまひて、御申には、いかに下女ふせいの者なれ共、あまたの人を召寄る事は、成り兼可申候と、玄以法印に申談じ、六條島原町の傾城共を召寄略下

〔泰平年表博信公〕

寶曆元年四月廿五日、越後國高田大地震

西刻より丑刻まで三十餘度、山崩民家倒、死者凡一万六千三百餘人、と云、

〔視聽草三集八〕越後地震

私當分御預所、越後國三島郡脇野町陣屋最寄之義、當十一月十二日、曉八ツ時大風雨、六ツ時頃雨も相止、黒雲一圓天を覆ひ、自然震動之音相聞、何となく怪異之様子も御座候處、同日朝俄に大地震、遠近之郷里暫時に火煙を上ケ、人々之聲山林に響候程之義、陣屋許脇野町、吉岡村、上岩井村、多分之家數即時に相潰、道路瓦石を飛し、即死怪我人等有之に付、陣屋詰手代共、即刻爲取締出役、火之元嚴重に防方取計、先火災之患者相遁候共も、誠に不慮危急之天災、漸命無恙免レ候え共、逆も家財悉く夥碎、剩出來秋取入之米穀に至迄、不殘散亂致し、引續十五日迄、四日之間、日夜之震動、不相止、假成無難、建家之分、震動度毎追々及潰、此上急變之程無覺、束家宅之住居難相成、原野に逃去罷出、大勢之者共、當日之夫食は勿論、寒氣之凌方手當に差詰り、危難に迫り候次第、右者國中一體之事に候へども、重に三島蒲原郡村々之内、震動強一村皆潰、即死怪我人等多ニ而山附ハ里方別而強く、山附之村々、山崩立木振返り、里方村々大地震裂ケ破レ、砂水湧上ゲ候村々も數多有之、其外脇野町最寄、私領寺社村々之内、一村皆潰之上、出火にて多分之潰家悉く焼失、人馬怪我夥敷有之趣、且脇野町陣屋之義は、悉く大破ニ及び候義口旨、彼地詰手代共ハ申越、變事不容易義と奉存